

みめぐみの

第54部





# みめぐみの

## 第54部



大谷光道著

### 目次

近くで遠い?『正信偈』(五) .....	2
一目惚れ・能発一念喜愛心 .....	3
正反対のものが同居・不斷煩惱得涅槃 .....	5
例外なし・凡聖逆謗齊回入 .....	7
たとえば・如衆水入海一味 .....	11
「徳川家康と東本願寺」 .....	13
小山評定 .....	13
お悔やみ .....	18
成然上人消息 .....	20
東照宮があつた! .....	23
そして、歴史的瞬間 .....	24
読者の貢 .....	28
寺務所からのお知らせ .....	29
あとがき .....	31

# 近くで遠い？『正信偈』（五）

能發一念喜愛心

ふたごころなく（一念）本願を信じよろこぶ（喜愛  
心）ので、

不斷煩惱得涅槃  
煩惱を断たないままで、涅槃を得る身となることが  
できる。

凡聖逆謗齊回入  
凡夫も聖者も極悪の人も、皆齊しく信心の道に入る

ので、

如衆水入海一味  
川の水が海に入つて一味になるがごとく、平等に救  
われる。

よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得。

凡聖逆誇ひとしく回入すれば、衆水の海に入りて一味なるがごとし。

## 一目惚れ……能発一念喜愛心

「能発一念喜愛心」は、強烈な「一目惚れ」です。

「一目惚れ」の経験のない方は、おそらくおられないでしょう。何も、彼や彼女という異性間の一目惚れでなくとも、物や事柄への一目惚れもあります。新型の車に惚れこんでどうして



もそれが欲しくなつたり、ショーウィンドーで目に止まつた宝石の虜になつたり、このような「物」への一目惚れもあり、また、他人の行つてゐる仕事やスポーツがかつこよくて羨ましくなつたりといふ、「事柄」への一目惚れもあります。

喜=よろこぶ。うれしい

愛=「執着すること」で、離れられない、忘れられないといふ想い。喰らいつきとなる気持ち

なので、

一念に喜愛の心を發す

とは、平たく言うと「一目惚れする」「惹かれて虜になる」ということで、信心を獲たそのときの心の躍動が、この一句（一行）には讀えられています。さて、そこに「能」が付いています。これは「よく……する」と読んで、「物事をなしうる能力があつて……できる」という意味です。それでこの一

行は、「よく惚れ心をおこす」とができる」ということなのですが、だれにそんな能力があつて、惚れ心をおこさせるのか、だれ（何）によつてそんな気持ちになるのか、どこにも書いてありません。これこそ阿弥陀様の本願力で、本願力によつて惚れ心がおこされるのです。自分でおこす心ではないので、この本願力を「他力」とも言うのです。

## 正反対のものが同居……不斷煩惱得涅槃

涅槃とは、梵語nirvāṇaの音写——音おん（インド語の発音）を漢字で表したもの——で、nirvāṇaの元々の意味は、吹き消すこと、または吹き消された状態という意味ですが、煩惱の火が吹き消された状態が覚りの境地であることから、覚り = nirvāṇa（涅槃）となつたものです。

したがつて、「不断煩惱得涅槃」とは、煩惱があるままで、残つて いるままで——吹き消されないままで——、涅槃をえるというのですから、同居す

るはずのない正反対の二つのものが同居していることになつて、全くおかしな、あり得ないことです。このようなことをさせるのも阿弥陀様の本願力で、本願力とはそれほど強力なものなのです。

ここで間違つてはいけないのは、「今、このままここで涅槃をえる」つまり「成仏する（仏になる）」ということではないということです。以前からもお話ししているように（『第三十一部』『第三十七部』参照）、「得」の字は来世、すなわち極楽に行つてからのことと指す字だからです。今えるのは、「やがて涅槃をえる身となる」、平たく言うと「やがて涅槃をえることが出来る権利を獲得する」ということです。いつも言う予約切符のことです。やがて涅槃をえるという予約切符を、今受け取るのです。ちなみに、もし今涅槃をえるのであれば、「獲」<sup>さらへく</sup>の字が使われていなければなりません。

親鸞聖人は、この部分を曇鸞大師の『淨土論註』から引いておられ、そこには、

煩惱を断ぜずして涅槃分を得

となつており、「涅槃分」と、「分」が付いていることからも明らかです。「分」とは、「仮に定められた身分」というような意味で、涅槃につながつてゐる状態を指していると考えればいいでしょう。やがて涅槃の木になる種を、今いただくのです。

では、何故『正信偈』には、

不斷煩惱得涅槃分

となつていなかつて……。それは、この行だけ八文字とすることはできないからでしよう。

## 例外なし……凡聖逆謗齊回入

凡||凡夫

聖||聖者

逆＝五逆、十惡という大罪を犯す者

五逆＝父を殺す。母を殺す。阿羅漢を殺す。僧侶の和合を破る。仏身から血を出す

十惡＝殺生・偷盜・邪淫・妄語・綺語・兩舌・惡口・貪欲・瞋恚・愚痴

誇＝誇法の者。仏法を誇る者。誇法は仏教では最も悪い罪

回入＝回心して帰入すること。淨土真宗では、特に、自力の心をひるがえして、他力の信心の世界に入ること。

凡夫、聖者はもとより、五逆・十惡の罪を犯した者、さらに誇法という仏教徒として最も重い罪を犯した者までもが、回心することで、阿弥陀様の本願の救いの中に入れていただける、ということです。ひと言でいうと「他力の信心によつて、誰しも例外なく往生できる」ということです。

ここは、都合のいいところだけが目について「どんなに悪いことをした人でも往生できる。それが淨土真宗だ」などと読んでしまいやすいところです。大切なのは「回入」ということで、回心、すなわち「信心をいただくことによって」という一言をいい加減にすませようとすると、とんでもないことが

起ります。「阿弥陀様のお慈悲の大きさ、深さからすれば、少々信心がない加減であつたくらいで、救われないことはないだろう」とか、また、信心とか他力という捕まえにくい事柄は横に置いてしまいたくなるというあたりが、その原因でしょう。

そして、「悪いことは、すればするほどいいのだ」という人たちまで出でます。それはどういうことかというと、親が出来の悪い子供ほど可愛がるのと同じく、「阿弥陀様も罪の深い者にこそお心をおかけになるのだ」と、さらに発展していった結果です。

これは私の思い過ごしでもなんでもなく、歴史の中で度々起こってきた問題です。**異安心**——間違った信心、教えを曲解した信心——の一種で、「**造惡無碍**（悪いことをしても、往生の邪魔にはならない）」という名前までついているのです。

これはまさに「悪人正機」の履き違えです。先に述べてきたように、阿弥

陀様の大きなお慈悲は、凡・聖・逆・謗の全てに行きわたつていて、他の仏様が見捨てられた悪人を救うことに特にお心を尽くされたのが阿弥陀様で、悪人正機とは、悪人こそが正機、つまり悪人こそがお目当て、「悪人こそが阿弥陀様のお客様」ということです。

しかしこれは、阿弥陀様側から見た見方であつて、こちらから云々すべきことではありません。悪人正機とは、「自分が悪人であるという自覚が芽生えて回心することによつてはじめて救われる」ということであつて、悪人の自覚と回心のないままでは、阿弥陀様のお目当てとはなれないことを、肝に銘じておかなければなりません。

淨土真宗は、これといった修行がなく、聴聞——仏法の話を聞く、読む、あるいは仏像を見るなど、自分の身体に仏法をしみこませる——を重ねて、自分自身の中で、自分の日常の中で阿弥陀様の本願を味わい、自分自身を試

し、教えと照らし合わせていく教えです。もし、他の宗旨で行われているような修行というものがあれば、その行によつて客観的にも、つまり他人から見てもその成果が確認しやすいのですが、浄土真宗では、古来、特定の行の形式を示さず、各自任せにしてきました。このため、私たちの間で目立つて飛び交うのは言葉だけなので、言葉の世界を好き勝手に歩き回つて、自分勝手な概念を作り上げ広めることも可能なのです。もちろん、他の人がいち早くそれに気づき、何らかの処置が出来れば、事なきを得るのです。しかしそれがおかしな説であるかどうか、すれすれの内容で、他人からも中々問題点を指摘しにくかつたりなどして、指摘したころにはすでにその説が蔓延まんえんしてしまつていて、手遅れということさえ起こり得るのです。

## たとえば……如衆水入海一味

川の水の味は、それぞれの川によつて皆違う味だけれども、海に流れ込む

ことによつて一つの味になります。これにたとえたのがこの一句です。凡・聖・逆・謗という、様々な特徴、個性、味を持った人間たちも、皆回心することで阿弥陀様の本願の救いの中に入れていただける、そして一つの味になるということです。

この出典は曇鸞大師の『論註』で、そこには、

海の性の一昧にして、衆流入れば必ず一味と為りて、海の味はひ、なに隨じがひて改まらざるが如し。

とあります。海の水がはじめから一味であること、川の水が流れ込んでもその味はやはり同じ一味であること、そしてさらに海の味が彼（川の水）によって変えられることが述べられています。

阿弥陀様の本願が、諸々の川の水を同じ潮（塩味）にしてしまう、そして川の水の影響を全く受けない、という海の強い力にたとえられています。

## 「徳川家康と東本願寺」

さきにお知らせしたように、今年の闡如會には「徳川家康と東本願寺」をテーマに宝物展を催し、闡如會に併せて行う展示も、今年で三度目となりました。法要は、お釈迦様と親鸞聖人のご誕生のお祝い、酬德會、家康公四百回忌、闡如上人御祥月の各法要です。

### 小山評定

今回の宝物の展示では、まず、

櫻欄蒔繪鞍(しゆろまきえくら)  
(シユロの図柄の蒔繪を施した鞍)

櫻 檬 蒔繪 鐙  
しゅ ろ まきえ あぶみ

(シユロの図柄の蒔絵を施した鐙)

団扇（葵紋入り漆塗り軍配型うちわ）

がひときわ注目を集めていました。

皆さん一樣に、鞍と鐙に施されたシユロの蒔絵の精緻さ、美しさに感嘆されていました。しかしそれ以上に、この鞍と鐙に多少感じられる使用感から、ここに家康公のお尻が乗ったのか、または教如上人がおやま小山（栃木県小山市）から京都まで帰られる長い道のりがしみ込んでいるのか、など、四百年以上の時の隔たりを超えて、観る人の口マンを駆り立てるものとなつているように思えました。

本願寺が二つに分かれたことについて、「それは、一向一揆を通しての経験からその勢力を恐れて、徳川家康が東西に分けたのだ」というのが定説のようになっています。何事にも言えることですが、事件の表に表れた事柄のみから短絡的に解釈するのは易しいことですが、真相は別のところにあると

いうことは、よくあることです。

本願寺の東西分派にはもちろん多くの人々がかわっていたのですが、歴史を探っていくとき、私は、天下統一の主人公であつた家康公と、一向一揆で戦つた教如上人（本願寺第十二世）の二人の信頼関係のドラマだと解しています。

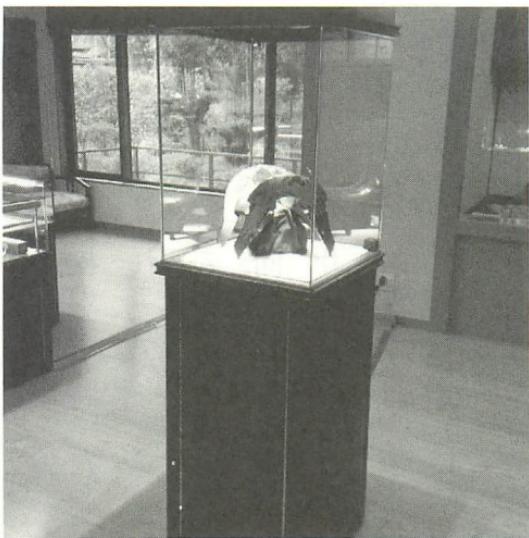
関ヶ原の戦いの二か月前に行われた有名な「小山評定」は、慶長五年（一六〇〇）七月、東北の入り口・小山で開かれた大名たちの集まりでした。家康公を先頭に、会津の上杉景勝みつなりかげかつを攻める準備会合であつたはずのこの集まりが、西で挙兵した石田三成と対決するための会議に変わりました。

教如上人は、関西の石田三成に関する情報を家康公に伝えるため、わざわざ御自ら小山まで向かわれたのです。当時はまだ天下泰平には程遠い時期だったので、文字通り命がけであったことは、論を俟まちません。教如上人の、危険を冒してもどうしても小山まで行くのだという強いご意志と、そこまで

して伝えに来てくれた心意気に打たれた家康公の関係が、見て取れます。

今日残された資料には、「石田三成以下の内謀の企てある由、直に言上ありしに……」（『大谷嫡流実記』）とあるだけで、さらに具体的な内容はわからぬのですが、教如上人が「直接会つて伝えなければ……」と、強く思われたところからして、その情報がよほど重要なものであつたということが察せられます。

そして、このとき家康公から教如上人が「お餞別」としていただかれた数々の物の一つが、この鞍であり、鐙であり、団扇であったのです。そのお餞別というのは、「御打物（うちもの）（武器のこと）」として「長柄槍五十筋、弓三十張、鉄砲五十挺」と「お召の御馬嶋津黒（家康公の「嶋津黒」という愛馬）ならびに御馬具等（鞍、鐙など）御拝領」（『大谷嫡流実記』）、そして団扇を「家康公自ら手渡し」とあります。馬がないのは仕方ないとして、このうち現存しているのは、鞍、鐙、団扇のみです。



展示風景

物々しい武器、またその数からしても武装して帰らないと危なかつたことが、容易に想像できます。京都から小山への行きがけはどうであつたのか、記録がないのでわかりませんが、少なくとも帰り道は相当危なかつたことがわかります。事実、教如上人が京都へ向かわれる頃には、既に「石田三成の叛逆既に成りて」はんぎぞく三成は大垣城（岐阜県）で待ち構えており、岐阜城の織田秀信ひでのぶに助けられて無事であつた、

というようであつたり、替え玉を立てて、替え玉が表の道を通り、教如上人が裏の険しい道を通つて、ということまでされたというのです。

武将ではなかつた教如上人が武将まがいのことをしてまで小山に赴か

れた、それはたいへんなことだったと思う反面、父・顯如上人と共に戦った、いわば「一向一揆の副大将」だったことを思えば、ご本人にはふつうことだつたのかも知れません。

この後、九月の関ヶ原の戦いで三成に勝った家康公が「天下人」となるのですが、京都へ向かわれる家康公を大津（滋賀県）まで出迎えるなど、教如上人との親密ぶりが、このことからも窺えます。<sup>うかが</sup>

この二年後、教如上人は、家康公から下京の烏丸七条の土地をいただかれ、東本願寺ができることになります。

## お悔やみ

これに遡ること八年、文禄元年（一五九二）十一月二十四日、父上・顯如上人が亡くなり、秀吉公から教如上人に宛てられたお悔やみ状が届きました。それが秀吉という有名人の手紙だからでしょうか、ずいぶん人目を引いてい

ました。

しかし、見る人を引くもつと別の理由もありました。おそらく、その翌文禄二年（三年説も）、教如上人に隠居を命ずることになる、その人の手紙だからでしょう。

そして、お悔やみ状とは言いながら、はるかにそれを超えて、まるで父親代わりの人からの手紙のようです。

父門跡は思いがけないことであつたが、やむを得ないこととは言え、言葉になりません。特にあなたは惣領のこと故、相続する立場にあります。法律を守り、行いを懇ろにし、家を立てる覚悟が肝要です。ですから、門跡（あなた）は本坊へ移りあなたの屋敷に理光院（三弟、後の准如上人）を移し、北の御方（母、如春尼）は一所に副うようとするのがよいと思いますよ。興門（次弟、興正寺第四世）、理門（理光院）を

も引き回し、母上へも孝行するのはもつともなことです。

なお、家来（浅野彈正、施薬院全宗、木下半介）に申し伝えさせます。

十二月十二日 秀吉（朱印）

この後、如春尼（教如上人の実母）の懇願により教如上人は隠居を命ぜられて不遇の人となり、本願寺は教如上人の弟・准如上人へと受け継がれます。

### 成然上人消息

話は、家康公のところに戻りますが、家康公は教如上人に東本願寺を創始させ、さらに前橋（群馬県）の妙安寺にあつた親鸞聖人のお木像を家康公が妙安寺と交渉の上、教如上人に寄付してくださいました。現在真宗本廟（旧東本願寺）の御影堂に安置されているのがそれです。

妙安寺は、二十四輩——親鸞聖人の二十四人の高弟——の一人であつた

成然じょうねんという人が開いた寺院です。その成然房が聖人からお木像を授けられ、その由緒を述べたのが『成然上人の消息』です。

・・・・・

建保二年四月五日、聖人は、私の願いに応じて弟子としてくださった。成然という法名をいただいた。聖人は、弥陀の尊像を図画し、伝来の仏舎利、法然上人より授与された袈裟、念珠等を授けてくださった。それから常にお側で近くさせていただいている。

・・・・・

貞永元年、聖人が帰洛されるとき、「あなたは関東にとどまり、辺鄙へんびの衆生を化益けやくしてください」と仰った。私は別れを悲しみ、お供いたしたいとお願ひした。師の仰おおせに、「私が京へ帰つてしまつたなら誰が私の教えを広めてくれるだろうか。願わくはあなたが関東にとどまつて念佛ごうぶつを弘通こうづうしてください」と仰つた。不肖の我身に、このような仰こうむを蒙るこ

とは本懐ほんがいだけれど、長い間少しも離れずお給仕申し、今度、都までのお供をしないことはお名残惜しいことだけれども、黙つてることとして、「仰に従いましょう」と申し上げたら、聖人もお喜びになつた。

ことに、「親族なので、形見をあげよう」と仰つて、ご寿像を御自ら刻んで、私にお与えになつた。坊舎を建立し、教法を弘めなさいと仰つて、九十字の名号かを書し、選択集等、その他、所持の数品を授与してくれださつた。私に、妙安寺という寺号をくださつて、上洛なさつた。

・・・・・

天福元年、稻田に妙安寺を草創し、彼の寿像を崇め、専修専念の旨を弘める。

・・・・・

弘長三年一月十二日 成然（花押）

成専房（妙安寺第二代）

## 東照宮があつた！

当山でも四月十一日（命日は四月十七日）、その法要を勤めましたが、今年は家康公の四百回忌に当たります。徳川家と深い関係を続けてきた東本願寺には、東照宮（日光（栃木県））、久能山（静岡県）の分社がありました。

それは、本堂の南西（全敷地の西南隅に当たる）に、南北三十メートル、東西六十メートルの敷地に築地壝<sup>ついじへい</sup>を回らせ、参道が延び、唐門をくぐり、回廊のある拝殿に参拝するようになつていたようです。そして元治元年（一八六四）、禁門<sup>きんもん</sup>の変（蛤御門<sup>はまらごもん</sup>の変）で、本堂や御影堂ほか伽藍の大部 分と共に焼失しました。

今回、その分社に安置されていた東照宮神像（家康公の絵像）と徳川家代々の位牌を展示了しました。

東照宮神像は、有名な天海大僧正の後継者となつた公海大僧正の手による

家康公の肖像です。公海大僧正は、教如上人の外孫（次女教証院如頼尼の子）で、三山管領（天台座主、上野寛永寺貫主、日光輪王寺門跡を兼務する日本佛教界の最高職）にまでなられた方です。また晩年は、京都山科に戻り毘沙門堂を再建し住持した方です。第十三世宣如上人、第十四世琢如上人とは非常に親しい間柄でした。

また、徳川家代々の位牌は、二代目秀忠公から十五代慶喜公までが安置されていました。

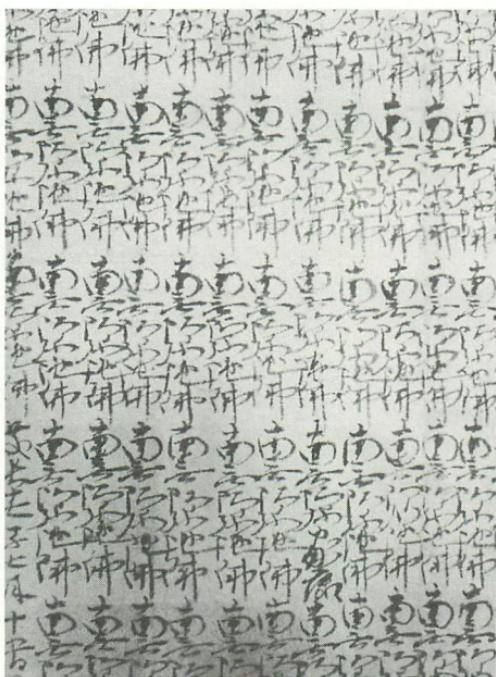
この東照宮は、落成からわずか二年で焼失したのですが、それ以前の東照宮の姿は、今のところわかつていません。東本願寺の中に東照宮の分社があつたとは、ほとんど知られていませんが、壮大な建築物であつたことからも、いかに徳川家とのつながりが深かつたかを知ることが出来ます。

## そして、歴史的瞬間

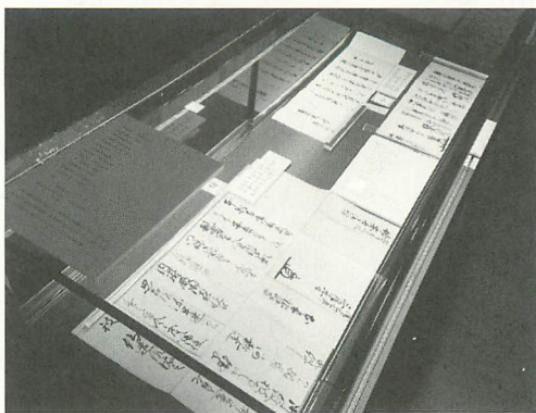
徳川家は浄土宗で、私たちと同じようにお念佛の家です。家康公は菩提寺の増上寺（東京・芝）にはずいぶん力を入れられましたが、宗旨を超えて方々の寺院の興隆に力を注がれました。

家康公が毎日の日課として名号（南無阿弥陀仏）を続けて書かれていたのは、有名です。毎日名号を書くことで、心を落ち着けられていましたであろうことが、整然と並ぶ南無阿弥陀仏から伝わってきます。お念佛を称える、お名号を書く、そのことによつて心が静まつて自分の道を誤らない、という大きなご利益を授かつておられたものと推察できます。

また、『家康公御消息』は、入洛する織田信雄（のぶかつ）（織田信長の次男）の処遇について、家康公から本願寺に対して何らかの指示が出されたことを示す書状で、大阪冬の陣における信雄の不可解な行動を裏付ける可能性があり、歴史の解明に役立つものと思われます。



家康公の日課名号



『板倉伊賀守ヨリ境内御判物ノ添状』は、新しい本願寺（東本願寺）の寺地の安堵（所有権を与える）を約束する家康公の花押入り書状が出されたことを本願寺に知らせるための書状です。下京の広大な土地を家康公からいただいた、歴史的瞬間を記した宝物です。

東西本願寺の分派について書いた、本誌『第四十一部』「日本史の中の大谷家」を併せてご覧いただければと思います。

来年もまた、テーマを設けて東本願寺の歴史を語る宝物展を催したく、計画を進めてまいります。ご期待下さい。



## 読者の貢

### 【第五十二部】

北海道小樽市 城戸 伸元さん

## 感想意見

鉦の音と読経の調和は仏教の音楽ですね。「声明は音楽?」の一文は私の心を響かせ、

歓喜で充たしました。

### 【第五十二部】

大阪府大東市 木村 知巳さん

はじめて拝見させていただきました。私は仏教等の宗教が好きなのですが、とても分かりやすく、やさしい内容だと思いました。

私の家は先日火事にあいましたが、こういう時はどうのりきればいいかなどのアドバイスをいただければ助かります。

失礼な内容を書いてしまっていたら申し訳ございません。

『編集部より』火事お見舞申し上げます。大変な時こそ親鸞聖人の前に座り、静かな時間を過ごすことも考えてみられてはいかがでしょう。ぜひ本願寺へお参り下さい。

寺務所からのお知らせ

## お月見コンサート開催！

恒例となりましたお月見コンサート、今年は「口笛世界チャンピオン」の儀間太久実氏を迎えて開催いたします。

大谷楽苑の合唱、当山僧侶の声明の披露など、秋の夜のひと時を楽しくお過ごし下さい。

お待ちしております！

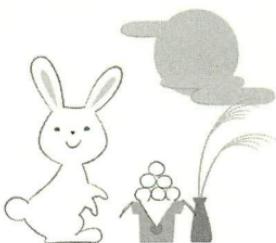
予約は寺務所まで、定員制ですのでお早めにお申込み下さい。

儀間さん

◇日 時 平成二十七年九月三十日

◇開演 午後六時（開場 午後五時三十分）

◇入場料 1000円（お月見団子とお茶つき）





『徳川家康と東本願寺』展  
無事終了いたしました  
多数のご来場ありがとうございました。



新教師誕生！  
当山に教師が三名誕生しました。  
舟橋大輔、竹島宗瑛、竹内教順、本願寺の次世代を担う  
彼らを皆さんでお育て下さい。

## あとがき

みめぐみの刊行委員会

「近くて遠い？『正信偈』」は五回目です。光道台下は「能発一念喜愛心」は、強烈な「一目惚れです」と解説されました。この「一目惚れ」の言葉を目にした時、『みめぐみの』創刊当初の『第五部』で説かれた「阿弥陀さんに惚れる」を皆さんには思い出されたでしょうか。光道台下のぶれることのないご教導に改めて感じ入ります。巻末にも記しておりますが、バックナンバーも取り揃えておりますので、遠慮なく寺務所までお問い合わせ下さい。

後編の「徳川家康と東本願寺」は、東本願寺の成立の一コマをかいま見られたのではと思います。この春の「闡如會」で併催された「宝物展」で鞍や燈、団扇等を直にご覧になつた方は更にそれが実感できたことでしょう。

また、先日光道台下がケーブルテレビ（池袋テレビ）の取材を受けられました。そのインタビュー番組がユーチューブで配信されています。近年テレビ等で当たり前に使われる「天国」という言葉に対して、仏教の立場から警鐘を鳴らしておられます。インターネットの環境が整つていればご覧頂けます。是非ご覧下さい。

皆様からのご感想、ご質問をお待ちしております。どしどしお寄せ下さい。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。  
『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

## みめぐみの 第54部

---

2015年7月5日 印刷

定価 200円

2015年7月10日 発行

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21  
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社

---





みめじみの刊行委員会刊